卒業論文　2022 年度

水の聖地選定における一考察

鈴木ゼミ 3 期生
入川幹久、大塚小春、高垣優輝、中川涼
松﨑智也、馬崎俊一、渡辺加奈

第 1 章　はじめに

京都は水が豊富である。京都盆地の下には琵琶湖に匹敵する 211 億トンの水に蓄えられている[i]。京都の水源である琵琶湖疏水が明治期に建設され、水運だけでなく発電や防火にも役に立ち、京都の人々の生活を支えてきた。また、京都の市街地を囲むように鴨川や桂川、宇治川が流れている。舟遊びから禊の儀式、舟運の歴史が刻まれている。井戸も同様である。数万もの井戸があり、そのひとつひとつに物語が育まれ、多くの人が使用してきた。昔から京都と水は深い関係にあるため京都という都を水の聖地にしたい。調査をもとに、京都の名水、食、生活について検証を加え、水の聖地について定義を図っていく。

第 2 章　聖地について

聖地には公に語られる聖地と自分自身のプライベートな聖地がある。公に語られる聖地はエルサレムといった大多数に認められた聖地のことである。

世界的に見る公の聖地にはエルサレムが挙げられ、パレスチナにある都市。世界最古の都市の一つであり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地とみなされている。ユダヤ教に所縁がある「嘆きの壁」は有名で、これは紀元 70 年にローマ帝国がエルサレム神殿を破壊した時に外壁の一部が残されたものである。入ることが許されたユダヤ教徒は外壁の一部に向かって離散の民であることを嘆き、祖国の再建を祈った[ii]。キリスト教にとって、エルサレムはイエス・キリストと深く関わっている。イエス・キリストの死、復活、昇天の舞台となった地でもある。イスラム教にとって、エルサレムはムハンマドがエルサレムから昇天したという伝説から、メッカ、メディナに次ぐ重要な聖地となる[iii]。

日本にも公に語られる聖地がある。沖縄県にある斎場御嶽が挙げられる。御嶽とは、南西諸島に広く分布している「聖地」の総称で、斎場御嶽[iv]は琉球開闢伝説にもあらわれる琉球王国の聖地である。また、琉球国王や聞得大君の聖地巡礼の行事を今に伝える東御廻りの参拝地として多くの人から崇拝されている。他にも学問の聖地として、福岡県太宰府市にある太宰府天満宮がある。「学問・至誠・厄除けの神様」として、日本全国はもとより広く世のご崇拝を集め、年間に約 1000 万人の参拝者が訪れる。天神さま（菅原道真公）をお祀りする全国約 12000 社の総本宮と称えられている。大宰府天満宮は菅原道真公の御墓所の上にご社殿を造営し、その神霊を永久にお祀りしている神社である[v]。

神との関係を有さない聖地として、兵庫県西宮市にある。1924 年 8 月 1 日に日本初の本格的な球場として誕生した阪神甲子園球場。春の選抜、夏の甲子園を長期に渡って開催している。高校野球の聖地として知られる。先に始まった夏の甲子園は 2018 年には第 100 回大会を迎えており、高校野球の歴史は 100 年を越えている。[vi]

自分自身のプライベートな聖地は『日本人にとって聖地とは何か』にある茂木健一郎氏を例に挙げる。茂木健一郎氏は親に健一郎という名前を付けられた。健一郎の由来は健康でいられるのが 1 番みたいな、いい加減な理由でつけられた。しかし、茂木健一郎氏にとっては聖なるものである。このような自分だけの聖地というものもある。その他のプライベートな聖地は自分のふるさと、育った場所である。自分自身の生まれた場所や育った場所、出身校など他者にとっては思い入れがないが、自分にとっては思い出であり、嬉しい記憶や悲しい記憶が入り混じった場所であり大切な場所。そのため、プライベートな聖地となる。

また、アニメの聖地巡礼もプライベートな聖地だと考える。アニメや漫画のファンが作品の舞台となった場所を聖地と捉え、そうした場所をめぐることを聖地巡礼と呼ぶようになった。アニメや漫画の一定数のファンが聖地として捉えている。

公の聖地は歴史があり、多くの人から崇拝され、知名度がある。プライベートな聖地は自分が聖地だと感じたら聖地だと決めることができる。これがそれぞれの聖地の特徴だと考える。そこで私たちは京都を舞台にして自分たちで考える「水の聖地」を創っていきたい。

第 3 章　名水について

日本の名水は世界でもトップクラスの水質を誇る。そして、とてもおいしい。このようなおいしい天然水が広く分布している国はほとんど無く、名水は日本の宝であり、日本の文化そのものである。

佐々木健氏の『そうだったのか！驚きの名水のチカラ：名水博士が語る水と健康、食、酒…』の書籍によると名水の定義はない。現在名水と呼ばれるものを 4 つ挙げる。

名水の定義はない。現在名水と呼ばれるものを挙げる。

1 つ目が天然名水。天然の湧水、井戸水、沢水などの水質的に良好なおいしい水。

2 つ目が市販名水。いわゆるペットボトル名水で天然水を主とするもの。3 つ目が機能水人工水で様々な機能を付加したとされるもの。4 つ目が霊水。宗教、信仰に基づく霊水、ルルドの泉などである。

まず、私たちは水の聖地＝名水と考えた。1985 年に定められた「名水百選」は歴史的に由緒ある水や昔からきれいでおいしいと言い伝えられてきた水を名水と定められている例が多い。

また、京都盆地の下には琵琶湖に匹敵する水量の水がある。琵琶湖は 275 億トン、京都盆地の下には 211 億トンの水が蓄えられている。『枕草子』などの平安期の文献においても名水が紹介されている。さらに、京都には 400 以上の名水がある。その一端を紹介する。

・西陣五水

今も現役で使われる「安居井」、「染殿井」（雨宝院）、「千代野井」、「桜井」、「鹿子井」
染殿井は織物が美しく染め上がるといわれ、かつては西陣の職人にも使われた

・御所三名水

「染井・染殿井」、「祐井」、「県井」
梨木神社に染井がある。藤原良房の娘の屋敷・染殿があった場所。口に含むと、まろやかで優しい味わいが口の中にほのかに広がる。
祐井は明治天皇の生母の実家・中川家の邸宅跡にある。明治天皇誕生翌年、日照りが続き、邸内の井戸が涸れた際に掘ったところ、豊かな水が湧き出した。

・醒ヶ井

源義経が住居としていた源氏堀川邸の井戸と伝えられている。
再興を繰り返したが太平洋戦争の建物疎開で井戸はなくなり、堀川通となった。
このことを惜しみ、昭和 44 年、五条堀川を下がった地に石碑を建立、その後堀川通西側に石碑が移され、平成 3 年に名水が復活。
京菓子店亀屋良長が店の新築に合わせ井戸を掘りなおし、醒ヶ井と彫られた石碑を立てた。
「菓子作りに醒ヶ井の水を使っている。この水を使うと香りがよく、腐りにくい」とのこと。

・柳の水

千利休も用いたと言われている名水
黒染の老舗馬場染工場では、生活水と黒染に使っている。この水で黒染をすると発色も良いし色落ちもしないそうだ。
鉄分を微量に含む黒染に適した水が豊富なことから、西洞院通を中心に黒染が発展した。

・御香水

伏見にある御香宮の「御香水」では病気が治癒、願い事がかなったことから清和天皇が名を与え、昭和 60 年環境庁の名水百選に選定された。手洗鉢の澄んだ水の底には 1 円玉や 5 円玉が沈んでいる。

このほか京都の名水は千本通から東側に多く、名水の多い地は様々な文化を育んでいる。

第 4 章　京都の水と食

京都には京料理や和菓子をはじめとした様々な美味しいものがある。それらは、昔から京都で食べられてきた伝統あるものが多い。受け継がれてきた味には豊富にある京都の水が関係している。京都は山紫水明の地と言われるが、山や川だけでなく京都盆地の地下に眠る

水が京都の人々の食を支え、京都の味をつくってきた。有名な京料理や豆腐屋、和菓子屋など様々な店で地下水を使用している。

ではなぜ、水道水やミネラルウォーターではなく地下水を使用しているのだろうか。私たちはその理由を 3 つ考えた。

・硬度からも分かるように水は汲む場所によってミネラルが少しずつ異なり、ミネラル分の違う水が各店のそれぞれの味をつくりだすため。

・京都の水を使用することで付加価値をつけるため。

・京都の店は京都の食べ物をつくるのに、水も京都のものを使うことにこだわりがあるため。

この章ではこれらを確かめることにする。

硬度	分類
0～15	超軟水
15.1～50	軟水
50.1～150	中硬水
150.1～250	やや硬水
250.1～	硬水

京都の地下水が食べ物に使われる理由はその硬度が関係している。本論文では硬度の分類を佐々木健氏の『そうだったのか！驚きの名水のチカラ:名水博士が語る水と健康、食、酒…』の硬度分類を参考に表のように設定する。

日本では海外の基準を採用して硬度 100mg/L 以下を軟水として、中硬水や超軟水の概念がない。しかし、調査をすると、関東では硬度の高い中硬水が、山間地域では硬度 50mg/L 以下の軟水が分布している。東京のように硬度が 100mg/L 近い中硬水だと昆布での薄味の出汁が出せず、鰹節の濃いめの出汁になる。関東の出汁がこのように西日本より濃いめなのは、水が近畿に比べてミネラル分が多い中硬水であるからだろうと佐々木氏も述べている。

はじめにでも述べたように、和風料理で有名な京都の盆地の下には琵琶湖に匹敵する 211 億トンの水が蓄えられており、鈴木氏によると 400 以上の名水が存在する[vii]。出汁文化といわれる京都には軟水エリアと中硬水エリアが分布している。軟水エリアには硬度が 50mg/L 以下の水が流れ、三山や鴨川の伏流水エリアを指し、京都の南側や伏見周辺では硬度が高くなっている。それぞれのエリア特性に応じて食の文化が発展してきたと考える。京都盆地の地質が古い時代の沖積層という粘土質で、そこからミネラルが溶出するからとされる。京の漬物がおいしいのも中硬水で育成した野菜に中硬水での乳酸発酵がミックスされ、酸味とうまみ（アミノ酸）がうまくミックスされているからだろう。

次に、京都の「日本酒」と「豆腐」に着目して地下水との関係を見ていく。酒蔵が多く建ち並ぶ京都市伏見は、江戸時代に地名を「伏水」と記されていたほど、古くから良質な地下水が湧いていたため、豊臣秀吉が城下町をつくってから酒造りが盛んに行われている。黄桜、月桂冠、宝酒造といった有名な酒造メーカーも多く建ち並ぶ。月桂冠の「さかみづ」や老舗酒造の山本本家の「白菊水」などは伏見七名水に選ばれている。伏見の水は着色の原因となる鉄やマンガンが少なく、カリウム、カルシウムをバランスよく含んだ中硬水だ。硬度は 80～100mg/L 程度のため、生酛という酒の種になる酒母の発酵の際に糖分が残留し甘口の酒

が醸造される。そのため、硬度 120～150mg/L 程度の六甲山系の地下水「宮水」で造られるものが「男酒」と呼ばれるのに対して、伏見のものは「女酒」と呼ばれる。

和食の中でも豆腐や豆腐料理には、軟水ではなく中硬水が適している。京都の有名な豆腐料理店の水は、硬度 80mg/L 程度の中硬水であることが多い。軟水だとにがりが分散しにくく、硬いところと柔らかいところが極端になりやすいが、中硬水はしっくり均一に、にがり成分が豆乳に分散、浸透でき、食感が良くなる。水さらしの時には、中硬水のカルシウムやマグネシウムが表面のタンパク質を固め、豆腐内部にうまみを封じ込める作用もある。このように、京都の地下水でしか出せない味があるからこそ、様々な店で使用され続けている。実際に、東京に出店した京料理屋（菊乃井）では、昆布の出汁の出方が違うからと京都の水を東京で使っている。

では、実際に使用している店ではどのようなところがあるだろうか。また、私たちは、豆腐作りに地下水が使われることが多いことから、京都の豆腐屋をいくつか調査した。

私たちは地下水を使用している豆腐屋を 3 軒巡ることができた。下京区の地下鉄五条駅近くにある「並河商店」、中京区錦市場にある「近喜商店」、京都市役所近くの「平野とうふ」にて購入し、なぜ地下水を使用するのか、お店のこだわりなどを聞かせていただいた。

・並河商店

大正 14 年（1925 年）創業と 100 年近く歴史がある。創業から地下水を使用し続けている。1981 年に京都市営地下鉄烏丸線が開通したことで一時水が止まってしまったが、掘り直すことで現在も地下水を使い続ける。地下水を使う理由は昔から使っているから今も使っていると店の方は話す。同じ水を使い続けることで味が守られてきているのだろう。

豆腐は、大豆の味が強く出るように作られている。地元の方はもちろん、海外からの観光客も購入されるそうだ。

写真 1.並河商店

・近喜商店

木屋町にある「賀茂とうふ　近喜」の分家として、明治 34 年（1901 年）に創業した。

錦の地下水を豆腐の製造だけでなく、洗い物や飲食などあらゆる面で使用している。水道水との違いとしては、水温が 17～18 度と一定であり、味にも違いが出る。また、水温が一定であることは、特に冬場の洗い物に役に立っているそうだ。今後も地下水は、このまま残してほしいと店主は話す。

写真 2.近喜商店

がんもと絹豆腐がこの店のおすすめの商品であり、主に年配の方や、地元だけでなく地方からの常連も購入されているそうだ。

・平野とうふ

明治 39 年（1906 年）創業と歴史は長く 100 年以上の老舗である。地下水を使用する理由は、温度が年中約 15 度と一定であるからだ。水道水だと夏はぬるく冬は冷たすぎる。

豆腐は、大豆・水・にがりのみで作っているため、無添加でからだに良く、自然な味わいとなっている。そのため賞味期限は当日中と短く、当日中に帰らない観光客には販売をしていない。主に地元の方や近くの柊屋旅館や俵屋旅館に卸されている。あげと豆腐を合わせて一日で 300 丁作っている。

写真 3.平野とうふ

私たちは上記の店で購入した豆腐と、スーパーの 60 円の豆腐など食べ比べも行った。豆腐屋の豆腐は各店味わいが異なり、それぞれの美味しさがあった。それぞれ原材料や製法にこだわった結果であろう。そして豆腐屋のものはスーパーのものと比較すると大豆の味を強く感じることができるとわかった。こだわりを持って作られた豆腐は地元の人々に愛され続けることで現在も多くの豆腐屋が点在しているのだろう。

写真 4.実際に食べ比べた豆腐

豆腐屋以外でも京都では地下水を使用している店が多くある。京菓子店「亀屋良長」では店先にある醒ヶ井の水を菓子作りに使用している。店主によると、「菓子作りに醒ヶ井の水を使っている。この水を使うと香りがよく、腐りにくい」とのことだ[viii]。

京生麩「麩嘉」でも井戸水を使用して生麩を作っている。1804 年創業で今も工程のほとんどを手作業で行っている。その工程の途中で井戸水が使用される。水道水を利用しない理由としてはその温度にある。井戸水の水温は 15.8 度で、夏場の水道水は 20 度を超える。商品を水で冷やす点においてこの 5 度の差は大きいようだ[ix]。

今回の調査によって、京都の食において地下水が多く使われているその理由は、硬度や温度が大きく関係していることがわかった。そのこだわりが店の味をつくりだし、昔から変わらぬ味が京都で受け継がれ、人々に愛され続けている。

第５章　水の人々の生活

京都には鴨川や桂川といった河川、そして琵琶湖疏水など多くの水資源が存在する。古くからこのような水の恩恵を受けて京都の人々は暮らしを育み、文化を発展させてきた。例えば、用水技術や治水工事の発達、寺や神社に息づく水への信仰心、庭園や茶の湯など水が欠かせない文化、酒や野菜といった京の伝統食。水なしでは語れない文化や産業が、古代から

現代にかけて様々な形で京都の人々の生活を潤している。このように第 3 章では水と人々がどのようにかかわってきたのか、水と文化について鴨川、水と産業について琵琶湖疏水から確認していく。

まず初めに紹介するのが鴨川だ。京都の中心を流れる川で多くの人々が鴨川から京都を連想させるのは、今に始まったことではない。多くの人々に親しまれている鴨川の河川敷は都市公園として整備され、鴨川実用調査（2015 年）では、約 268 万人が散策や気分転換、休憩などに利用しており、その内 81%が京都市民である。

そして鴨川の河川敷といえば外せないのが、京都の風物詩としても知られる鴨川納涼床だ。川の上に桟敷を設けて料理を楽しむ納涼床は河川の親水活用に関して最も重要な事例であり、川と暮らしの関係を語る上で欠かすことはできない。約 400 年前、1650 年頃に始まって以降、琵琶湖疏水・鴨川運河の開通工事や治水工事といった鴨川の変遷とともに姿形を変えながら今に息づいている。

次に紹介して行くのが、琵琶湖疏水だ。京都市民の 99%以上が琵琶湖疏水の水を飲んでいる。京都市は暮らしの生命線である水源を琵琶湖に求め、その水をもたらすのが琵琶湖疏水である。疏水が必要となった理由に「京都復興」が挙げられる。千年の都である京都は東京遷都によって幕末に約 30 万人であった人口が、1873 年には 23 万 8000 人に減少するなど活力を失っていた。沈滞した京都を復興するために、第 3 代京都府知事の北垣国道が明治政府の要人である伊藤博文や山県有朋などと協議を重ね、1890 年に建設したのが、大津市観音寺の取水地点と京都市伏見の濠川を結ぶ約 20 ㎞の第 1 琵琶湖疏水である。

疏水の水は、電力を生み、舟運を開き、防水用水に活用されるなど、様々なかたちで京都の町を発展させてきた。明治 30 年代には、市民の飲料水確保のために水道事業が要望され、明治 45 年 4 月には、琵琶湖疏水より取水した「蹴上浄水場」から京都市初の給水を始めた。物資の運輸目的であった舟運が近年の観光ブームにより、観光用の渡航船も賑わいを見せ 2018 年に「びわ湖疏水船」が 1951 年に廃止となった観光船以来の復活となった。

ほかにも琵琶湖疏水は、農地に水を引くための灌漑用水や、水車を使った精米などにも活用されてきた。今でも疏水から取水される用水路は、山科や伏見にある農地を潤している。

これまで水と京都の人々の生活の関係について見てきたが、まだまだ水と人々の関わり方はある。京都の伝統産業である「京友禅」。現在は水質汚濁防止法（1971 年）施行に伴って中止されているが、以前は鴨川や桂川など様々な河川で糊を落とすために反物を洗う「友禅流し」が行われていた。また、同じく京都の伝統的な文化である茶の湯も水資源が豊富な京都だからこそ発展したものであり、暮らしに定着していった。[xxi]

第６章　地下水と発展

第２章で述べてきたように京都市には、良質で豊富な地下水が存在しており、平安時代以前から生活用水に利用されてきた歴史がある。そして今なお地下水は、染色業や酒造業をはじめとする伝統産業において利用されるなど、京都の生活や文化、経済を支える重要な資源と

なっている。また、災害時等の対応として、井戸の所有者等から市民に地下水を提供していただく平成 7 年（1995 年）「災害時協力井戸制度[xii]」を整備するなど、地下水は非常時の市民の生活用水としても重要なものとなっている。この章では地下水における過去から現在までの発展・使用・課題について述べていく。

京都盆地は古来より地下水の利用が盛んである。それは平安京の時代から今も変わらない。平安時代の初期以来、平安京は深泥池や船岡山周辺など、天皇らによる遊猟の地として知られていたが、他に毎年 4 月中酉日に催行された加茂祭の主要舞台となる重要な地域でもあった。船岡山は御所に通じるメイン通り、現在の千本通りにあたる。現在の京都御所は、平安京の時代は貴族の住む地域であった。この貴族が屋敷の庭に池を持つことはステータスシンボルであった。これらは寝殿造の屋敷と大池泉式の庭園に代表され、紫式部日記絵巻、年中行事絵巻などに描かれている。その池の水は地下水が一つの供給源であった。現在の京都御所辺りの表層地質は砂礫層が広く分布しており（楠見 2014）、3m も掘れば良質な地下水が得られた。京都市内の表層地質分布は、堀川通りから東側、東大路通りにかけて砂礫層の優勢な地層が分布している。一方、西大路通りから桂川にかけて砂礫層より粘土層が優勢な地域が多く分布しており、浅いところから良質な地下水を得ることが難しい地域となっている。実際、平安京の水を守るために建立された下鴨神社、京都御所、二条城は、良質な地下水が得られる同じ砂礫層の上付近に建てられている。このように良質な地下水を得られる場所を中心に発展していったとされる。このことについては今後さらなる研究が期待される。

「京の台所」と称されることの多い錦市場[xiii]。京野菜、琵琶湖の川魚や京料理の料亭や割烹だけではなく、おばんざいなどの家庭料理に使われる野菜、魚が並ぶ。この市は質の良い地下水に恵まれていたことに起因して発展を遂げた。正式な記録によるものではないが、市場としての起こりは平安時代の頃、すでにこの市が立っていたと推測されている。1615 年、江戸幕府が京都に公認した上の店、錦の店、六条の店の三店魚問屋が 1 つの錦市場であった。錦市場には「降り井戸」という生鮮食材を保存する井戸がある。それは年間を通して約 15 度の水温を保つ地下水は「錦の水」と呼ばれ、「京の台所」を支えた名水として知られている。

京都には 211 億トンという豊富な地下水があるが、昭和 30 年代に入り、宅地化や道路舗装、地下工事などで地中への降水の浸透量が激減し、日常の暮らしにおいて汲むことができる地下水量が少なくなった。さらに、地表面に流出した降水は河川や下水に流れ込むので、地中への水の供給量が少なくなっている。近年の河川は水害を防ぐためにコンクリートで固めることが多くなり、水が浸透しにくくなっている。伏見でもかつて[xiv]豊富に湧き出していた酒造用の浅井戸が自噴しなくなり、現在では地下 50m～100m の深井戸からポンプを使って汲み上げている。このように発展の裏には課題が存在する。現在では、地下水を守るためではないが、濠川の清掃美化活動が継続され、遊歩道、公園の整備や植樹も行われている。多様なアプローチによって、地下水を守るには地表面や河川周りの保全整備が重要となる。

第７章　まとめ

この研究を行うことによって河川や地下水が地域住民と深い関わりがあることに気づくことができた。

また、京都の水は、生命維持の他に京都の文化や景観を彩ってきた必要不可欠な存在である。実際に、京市内の名水や地下水を使用している豆腐屋をまわり、生活に密着していることがわかった。特に、水の硬度や水温の些細な差が食材の味や質感に影響しないよう、創業当時から変わらずにその場所の地下水にこだわっている。しかし、私たちの生活の質を向上するため、道路工事や地下鉄の開通などにより、地下水が得づらくなってきている。

そこで、私たちはこれまでの章を踏まえて水の聖地の選定基準をもうけ、五点に定義づけ細分化した。

一点目は、文明・文化を発展させる。
二点目は、経済的価値がある。
三点目は、観光資源になる。
四点目は、日常生活（料理など）に密着している。
五点目は、人々に認められている。

この視点にもとづくと、例えば、「琵琶湖疏水」、「納涼床」、「錦天満宮　錦市場の水」、「貴船神社」、「鴨川デルタ）　などである。このように五点に着目することにより、水に付加価値を与え人々の意識に訴えかけ、水を守っていくことが大事である。また、福井県から京都府に新幹線を通す計画があり、京都市の門川大作市長は記者会見で「京都盆地の底に豊かに蓄えられた水脈に影響を与えないことが何よりも大事」と述べられている。[xv]このような事象で地下水脈が断たれないように本論文が京の地下水を守るきっかけとなることを切に願う。

私たちが生きていく上で水はなくてはならないものだが、京都では生命維持のためだけでなく、文化や産業の発展、生活を彩るものとしても水が重宝されている。この研究を通して私たちも実際にフィールドワークなどで京都の水と生活の関係について触れてきた。この論文を是非たくさんの人々に読んでもらい、京都の水の価値を知っていただければ、私たちの研究も本懐を遂げるといえるのではないのだろうか。

---

[i]　楠見春重（2014）「古都に眠る千年の地下水脈」日本醸造協会誌 2014 年 109 巻 1

[ii]　［PDF］9 聖地と巡礼 00092.pdf (koubundou.co.jp)
00152.pdf (koubundou.co.jp)

[iii] 聖地/キリスト教の豆知識「聖地/キリスト教豆知識（kyobunkwan.co.jp）」
聖地/キリスト教豆知識（kyobunkwan.co.jp）

[iv] 斎場御嶽とは｜世界文化遺産 斎場御嶽（okinawa-nanjo.jp）
斎場御嶽とは｜世界文化遺産 斎場御嶽（okinawa-nanjo.jp）

[v] 太宰府天満宮「太宰府天満宮（dazaifutenmangu.or.jp）」覧

[vi] 佐々木健（2017）『そうだったのか！驚きの名水のチカラ:名水博士が語る水と健康、食、酒…』，地人書館

[vii] 京都産業大学 鈴木康久へのヒアリングによる

[viii] カッパ研究会（2013）『京の水案内』，京都新聞出版センター

[ix] 平野圭祐（2003）『京都水ものがたり』，淡交社

[x] 鈴木康久、肉戸裕行著（2022）『京都の山と川　「山紫水明」が伝える千年の都』，中央公論新社版

[xi] 千年の都の水の文化｜まちひとこころが織り成す京都遺産
https://kyoto-bunkaisan.city.kyoto.lg.jp/kyotoisan/nintei-theme/mizunobunka.html

[xii] 京都市の地下水利用の在り方等についての意見書 京都市上下水道事業経営審議委員
https://www.city.kyoto.lg.jp/suido/cmsfiles/contents/0000196/196103/ikensho.pdf

[xiii] 錦市場商店街 https://www.kyoto-nishiki.or.jp/about/https://

[xiv] 月桂冠 https://www.gekkeikan.co.jp/enjoy/kyotofushimi/water/water06.html

[xv] 北陸新幹線「延伸」に大逆風　千年の都「京都」を脅かす地下水脈の打撃、市長も思わず釘刺し懸念の現実とは
https://onl.la/PAGLLCw

※　ホームページは 2023 年 1 月 23 日確認